

# 赤塚遺跡

焼津市

令和3年度焼津水産高等学校普通教室棟老朽化対策工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

2023



# 序

赤塚遺跡は大井川が形成した扇状地上に立地し、焼津水産高等学校を中心に古墳時代の集落が展開しているとされてきました。

調査の結果、土坑、溝状遺構が検出され、遺物は少量ながらも須恵器、土師器が出土しました。これにより今まで知られていなかった奈良時代から平安時代の集落の存在が明らかになりました。焼津市の調査例を合わせると遺跡は古墳時代後期から中世にかけての集落が存在し、遺跡の中心は、高校の西側に広がっていると推定されます。本書が研究者のみならず、県民の皆様に幅広く活用され、地域の歴史を理解する一助になることを願います。

最後に発掘調査ならびに本書の作成にあたり地元の皆様、静岡県教育委員会、焼津水産高等学校、焼津市教育委員会の関係機関各位に多大な御理解と御協力をいただき、ここに心よりお礼申し上げます。また、現地作業、資料整理に関わった職員・作業員諸氏の労苦に対しても謝意を表します。

2023年2月

静岡県埋蔵文化財センター所長  
深井 善一郎

## 例　　言

- 1 本書は静岡県焼津市焼津5丁目5-2に所在する赤塚遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 調査は令和3年度焼津水産高等学校普通教室老朽化対策工事に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として静岡県教育委員会の依頼を受け、静岡県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本調査の期間及び面積は以下のとおりである。  
現地調査：令和3年12月～令和4年3月　面積188m<sup>2</sup>　資料調査：令和4年7月～令和5年3月
- 4 調査体制（所属等は調査当時のものである）。  
令和3年度  
所長　野村浩司 次長兼総務課長 吉田光廣 技監兼調査課長 中鉢賢治  
総務班長 島田真紀 主任 杉山 勝 課長代理兼調査班長 富樫孝志 主査 井鍋誉之  
令和4年度  
所長 深井善一郎 次長兼総務課長 鈴木良二 技監兼調査課長 中鉢賢治  
総務班長 島田真紀 主査 野中敏正 課長代理兼調査班長 富樫孝志 主幹 中川律子
- 5 本書の執筆は、第1章～第2章第1節を井鍋誉之、第2章第2節～第3章を中川律子が行い、編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。
- 6 発掘調査における業務委託は以下のとおりである。  
発掘調査支援業務委託：国際文化財株式会社 整理作業・保存処理業務委託：株式会社 イビソク
- 7 調査にあたり、以下の方々から御指導・御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。  
丸杉俊一郎 細田和代 鈴木 源（敬称略）
- 8 本報告書に係る出土遺物及び実測図、写真等の記述は、静岡県埋蔵文化財センターで保管している。
- 9 本書で扱う座標値は世界測地系に準拠し、レベル数値は海拔高である。

## 凡　　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

- 1 本書で用いた遺構などの位置を表す座標は、全て平面直角座標第VII系を用いた国土座標、世界測地系を基準とした。
- 2 調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。
- 3 図面の縮尺は、図ごとに適当な縮尺とし、それぞれにスケールを付した。
- 4 色彩に関する用語・記号は、『新版 標準土色帳 1999年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修1999）を使用した。
- 5 第1章第2節の「第1図 遺跡位置図」は、国土地理院発行 1:2,500地形図「焼津市」を複写し、加工・加筆した。
- 6 本報告書作成にあたり利用した引用・参考文献及び、註尺は、巻末にまとめて掲載した。
- 7 遺構略号は、次の通りである。 SD:溝跡 SP:柱穴 SK:土坑

# 目 次

序 例言 凡例

## 第1章 調査概要

|             |   |
|-------------|---|
| 第1節 調査に至る経緯 | 1 |
| 第2節 遺跡の環境   | 3 |

## 第2章 調査の成果

|          |   |
|----------|---|
| 第1節 検出遺構 | 6 |
| 第2節 出土遺物 | 7 |

|        |    |
|--------|----|
| 第3章 総括 | 10 |
|--------|----|

写真図版 抄録

# 挿図目次

|               |   |               |    |
|---------------|---|---------------|----|
| 第1図 道路位置図     | 1 | 第4図 遺物図       | 8  |
| 第2図 赤塚遺跡の立地環境 | 3 | 第5図 赤塚遺跡の調査箇所 | 11 |
| 第3図 遺構図       | 7 |               |    |

# 挿表目次

|           |   |             |   |
|-----------|---|-------------|---|
| 第1表 調査工程表 | 2 | 第4表 遺構観察表   | 7 |
| 第2表 遺跡地名表 | 3 | 第5表 出土遺物観察表 | 9 |
| 第3表 調査履歴  | 5 |             |   |

# 挿写真目次

|               |   |                |   |
|---------------|---|----------------|---|
| 写真1 クレーンによる搬入 | 2 | 写真3 高校生への現地説明会 | 2 |
| 写真2 遺構掘削作業    | 2 |                |   |

# 写真図版目次

|                         |  |          |  |
|-------------------------|--|----------|--|
| 図版1 1 赤塚遺跡遠景（焼津漁港方面を望む） |  | 図版3 出土遺物 |  |
| 図版2 1 赤塚遺跡全景（南東から）      |  |          |  |
| 2 SD1 完掘状況（北東から）        |  |          |  |



# 第1章 調査概要

## 第1節 調査に至る経緯

**経緯** 赤塚遺跡が所在する焼津市は静岡県の中部地域にあたり、平成20年に旧焼津市と旧大井川町が合併した都市である。市の周囲は北西から西にかけて藤枝市、南西は大井川をはさみ吉田町、北は高草山を境に静岡市、東は駿河湾に面している。

市の特徴として焼津漁港、大井川漁港の港湾を有し、特にカツオ・マグロを主とする遠洋漁業の基地として、全国有数の水揚げ高を誇る。市の人口は約140,000人で、近年では区画整理事業、幹線道路の整備などにより静岡市のベッドタウンとして発展している。

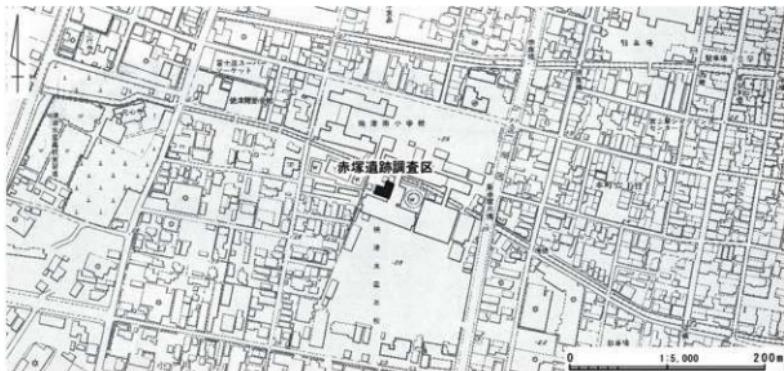
赤塚遺跡が所在する焼津市焼津地区は市の中心部にあたり、市街地が進んでいる。JR東海道本線焼津駅より約1.7km南の範囲で、学校等の公共施設が立ち並ぶ。中でも焼津水産高等学校は、大正11年（1922）に焼津町立焼津水産学校として成立し、県立に移管後、令和4年11月には学校創立100周年を迎える。県内唯一の水産高等学校であり、海に関する航海術だけでなく、水産資源を活かす栽培や食品加工なども取り組むことができる学校である。

焼津水産高等学校の校舎は昭和48年に建築され、50年近くが経過しており、老朽化がすんでいた。このため、現在の昇降棟を解体・撤去し、その場所にあらたに新築校舎を建築することとなった。

校内の敷地は、大部分が周知の埋蔵文化財包蔵地である赤塚遺跡の範囲に該当するため、令和元年度に県文化財課と県教育委員会教育施設課との間で取り扱い協議を実施してきた。

令和元年度に工事予定地内において県文化財課が確認調査を実施し、現在の地表より約2m下で古墳時代の土器が確認された。この結果をふまえ、埋蔵文化財に係る取り扱い協議を実施した結果、新築の校舎建物範囲のうち188m<sup>2</sup>部分が記録保存のための埋蔵文化財発掘調査の対象範囲となった。

発掘調査は、静岡県埋蔵文化財センターが主体となり、令和3年12月から令和4年2月まで現地調査を実施した。資料調査は令和4年7月から実施し、2月に発掘調査報告書を刊行した。調査に係る工程は表1のとおりである。



第1図 遺跡位置図



写真1 クレーンによる搬入



写真2 造構掘削作業



写真3 高校生への現地説明会

**現地調査** 現地調査を実施するにあたり、調査区に5m間隔のグリッドを設定した。起点は調査区対象地に国家座標軸（世界測地系）に基づき、北西隅（X=-12640Y=16710）とした。

発掘調査の資機材については工事の関係で校内にある橋梁が撤去され、車両による搬入が困難となつたため、大型クレーンにより調査区内へ搬入した。このため、吊上げには重量制限があったため、表土除去、排土移動に用いる重機は、小型のバックホウを2台用いることとなった。排土については場内に仮置きした。このほか、発電機、ベルトコンベアについてもクレーンにより搬入した。

表土除去後、人力で包含層掘削、遺構検出、遺構掘削を行った。低湿地であるため、湧水が認められたため、水中ポンプを用い、排水処理を行った。湧水が激しく、特に遺構検出作業は困難を極めた。遺構図はトータルステーションを用い、図化した。写真撮影はフルサイズのデジタルカメラを用いた。今回、撮影用に高所作業車が搬入できなかつたため、ローリングタワー及び学校の屋上から景観写真を撮影した。完堀の状況になったところで、焼津水産高校生約70名を対象に現地説明会を開催した。調査終了後は、埋め戻しを行い、現地調査を完了した。

**資料調査** 本格的な整理作業、保存処理作業は令和4年度に株式会社イビソクに業務委託し、当該静岡県埋蔵文化財センターにおいて実施した。

7月より整理作業に着手し、土器の注記作業、接合作業を行った。8月以降は、記録類の編集作業、土器実測作業、トレース作業、遺物撮影を行った。令和5年2月に調査報告書を刊行し、すべての作業を完了した。

第1表 調査工程表

| 業務   | 令和3年度 |    |    | 令和4年度 |    |    |     |     |     |    |  |
|------|-------|----|----|-------|----|----|-----|-----|-----|----|--|
|      | 1月    | 2月 | 3月 | 7月    | 8月 | 9月 | 10月 | 11月 | 12月 | 1月 |  |
| 現地調査 | 準備・搬収 | —  | —  |       |    |    |     |     |     |    |  |
|      | 掘削作業  | —  |    |       |    |    |     |     |     |    |  |
|      | 測量等作業 |    | —  |       |    |    |     |     |     |    |  |
| 資料整理 | 整理作業  |    |    | —     | —  |    |     |     |     |    |  |
|      | 報告書編集 |    |    |       |    | —  | —   |     |     |    |  |

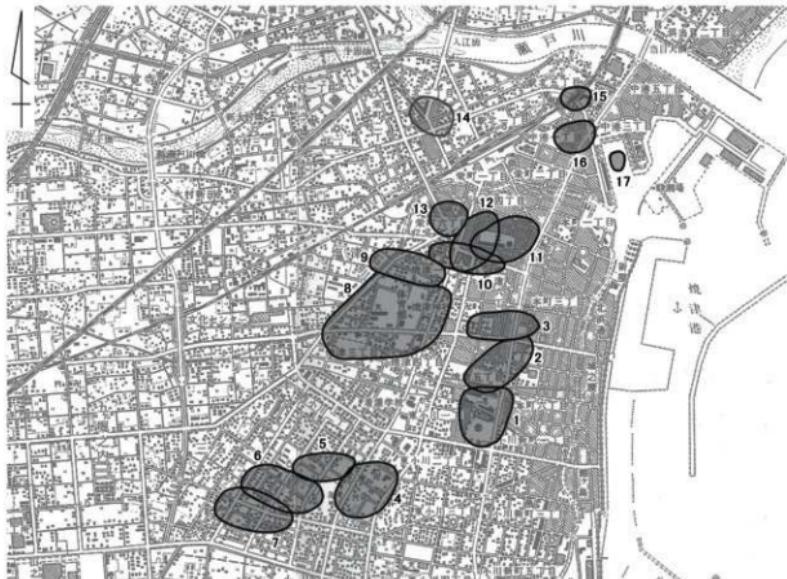
## 第2節 遺跡の環境

### (1) 地理的環境

**赤塚遺跡の位置** 大井川左岸に広がる扇状地は一般に志太平野と呼ばれており、その範囲は島田市、吉田町、藤枝市、焼津市に及ぶ。大井川は、南アルプスの間ノ岳（標高3,190m）を源に発し、駿河湾に注ぐ長さ168kmの一級河川である。焼津市の南部は大井川が形成した扇状地の東端に位置し、市の北部には朝比奈川、瀬戸川による自然堤防・後背湿地、駿河湾沿いには海岸砂礫州がみられる。

近世以前において大井川の流路は定まっておらず、現在より北側を流れる主流と多数の網状流路が存在していたとされる。とくに扇状地西端は流れも強く、洪水等も多いため、遺跡も良好に残存しておらず、これまでのところ航空自衛隊静浜基地付近に存在する藤守遺跡以外確認されていない。

他方、赤塚遺跡が所在する扇状地東端は、大井川扇状地内に形成された自然堤防（焼津微高地、小川微高地）に位置し、古墳時代以降、本格的に遺跡が展開していく様子をみることができる。



第2図 赤塚遺跡の立地環境

第2表 遺跡地名表

| 遺跡名      | 時代          | 種類    | 遺跡名      | 時代          | 種類  |
|----------|-------------|-------|----------|-------------|-----|
| 1 赤塚遺跡   | 古墳          | 集落    | 10 清瀬遺跡  | 古墳、平安、中世    | 集落  |
| 2 須賀遺跡   | 古墳、中世       | 散布地   | 11 清下遺跡  | 古墳、奈良、平安、中世 | 集落  |
| 3 南地畠遺跡  | 古墳、中世       | 集落    | 12 堀津古墳群 | 古墳          | 古墳  |
| 4 小瀬田遺跡  | 古墳、中世       | 集落、古墳 | 13 堀添遺跡  | 古墳、奈良、平安、中世 | 散布地 |
| 5 小瀬田西遺跡 | 弥生、古墳       | 集落、古墳 | 14 牛田遺跡  | 奈良          | 散布地 |
| 6 通帶田遺跡  | 弥生、古墳、平安、中世 | 古墳    | 15 中港北遺跡 | 弥生、古墳       | 散布地 |
| 7 小川城    | 古墳、中世       | 集落、城館 | 16 中港遺跡  | 弥生          | 散布地 |
| 8 宮之原遺跡  | 古墳、平安、中世    | 集落    | 17 伊天遺跡  | 圓文          | 散布地 |
| 9 軽田遺跡   | 古墳          | 散布地   |          |             |     |

## (2) 歴史的環境

焼津市域では、旧石器時代の遺跡は確認されておらず、縄文時代の遺跡についてもわずかな遺物が採集されているに過ぎない。弥生時代にはいると低地や丘陵に遺跡が分布していく。とくに低地の焼津微高地、小川微高地には弥生時代後期から古墳時代にかけて集落、墓域が形成され、後背湿地には、水田が営まれていく状況である。

**古墳時代** 小川微高地上には小深田西遺跡（5）、小深田遺跡（4）、道場田・小川城遺跡（6、7）が挙げられる。

小深田西遺跡は弥生時代後期末から古墳時代前期にかけて集落と墳墓が確認されており、土地利用のあり方として集落から墳墓群へ変遷していく。中でも墳墓群は2群に分けられ、四隅が切れる方形周溝墓群と周溝が全周する大型の方形墳が確認された。方形墳は独立して分布し、鏡、玉類が出土している。方形周溝墓にみられる弥生時代的な墓制から方形墳の出現は特定の階層を示すものとして注目される。

小深田遺跡は県内においても大規模な古墳時代前期の集落である。7地点に及ぶ調査により100棟以上の竪穴建物が検出されるとともに掘立柱建物、井戸、溝が見つかっている。とくにコ字の溝で区画された土地に掘立柱建物が多く配置され、集落内の有力者層の居住域として理解されている。このように小川地区の遺跡群では、方形区画内の建物群と大型の方形墳の存在から集落と墓域を一体として把握することが可能である。

道場田・小川城遺跡は微高地から後背湿地に向かう傾斜地に立地する遺跡で、古墳時代初頭の方形周溝墓、中期の水田が確認されている。方形周溝墓群は、微高地縁辺部に分布し、周溝を共有、重複しながら密集して構築されている。

古墳時代中期の小区画水田も微高地から後背湿地にかけて検出されている。大畦畔に区画された内部には正方形、長方形の小区画が見られ、少なくとも3期にわたり水田経営されていたとされる。また、大畦畔の内部には、土師器を主体として滑石製有孔円板、勾玉、臼玉が出土しており、水田祭祀に関わるものとされる。道場田・小川城遺跡は小深田西遺跡で見つかった古墳時代の集落・墳墓群や小深田遺跡の集落と密接な関係をもっており、当該地域の墓制の変遷や古墳時代の集落と墓域の関係を知ることのできる貴重な資料である。

古墳時代中期の集落遺跡では、焼津微高地において宮之腰遺跡（8）が該当する。宮之腰遺跡は昭和初期の発見以来、多くの遺物が出土しており、宮之腰I、II式土器が設定され、静岡県の古墳時代中期後半から後期前半の土器編年を考える上で欠かせない資料となっている。遺構は竪穴建物、掘立柱建物、井戸、祭祀遺構などが検出されている。包含層から筋砥石が出土していることから集落内で玉生産が行われていたと指摘される。とくに祭祀に関連する土器集積が目を引く。土師器壺を重ね合わせ、滑石製模造品を用いる様相は、道場田・小川城遺跡の大畦畔の中においてもみられ、集落内、生産域において共通の祭祀が行われていたとされる。

古墳時代中期～後期にかけて小川微高地で赤塚遺跡（1）、焼津微高地で道下遺跡（11）、道添遺跡（10）が見られるようになる。

赤塚遺跡は昭和57年に焼津南小学校の運動場改築に伴い調査を実施し、7世紀代の土坑、溝状遺構が見つかっている。道下遺跡は昭和初期から遺跡の存在が知られており、古墳時代中期から後期にかけての竪穴建物、溝、祭祀遺構が検出されている。

道添遺跡は、古墳時代中期から後期の集落・墓域である。中期後半から後期中葉までは集落として機能し、後期後半は横穴式石室が築造される。このほか、低地部の古墳は、塩津古墳群が知られている。いずれも6世紀末に築造されており、低地の群集墳として注目される。

このように弥生時代後期半から古墳時代前期前半にかけて小川微高地において最初に集落が形成さ

れ、近隣に同時期の墓域が配置されるようになる。そして古墳時代中期後半に入ると焼津微高地において集落が展開するものの、水田域は焼津微高地では現在のところ未発見で、小川微高地の道場田・小川城遺跡において確認されているにすぎない。

後期に入ると焼津微高地の北東を中心にあらたに集落・古墳群が展開するようになり、終末期には、赤塚遺跡にみられるように小川微高地にも集落が立地するようになる。

小川微高地・焼津微高地は、東西2km、南北1.5kmと狭く細長い範囲であるにもかかわらず、古墳時代を通じて集落・墓域・水田城が展開している。志太平野は大井川の氾濫原が広がり、安定した微高地は少なかったと考えられる。その中でも駿河湾に面した小川微高地・焼津微高地は古墳時代以降、交通・流通の拠点として大きな役割を果たしたことであろう。

**奈良・平安時代** 小河駅については、『延喜式』兵部省諸国駅伝馬条に駿河国六駅の一つとしてその名がみえる。『和名類聚抄』の郷名にも小河郷があり、いずれも現在の焼津市小川に比定され、小川地区的字出口道上もしくは鈴宮の自然堤防上の微高地が有力な候補地とされる。

現在のところ、発掘調査において小河駅を比定できるような遺構は見つかっていないが、道場田遺跡において平安時代の木棺墓や「万」銘の銅印が出土しており、一般的な集落とは異なる様相である。

**中世以降** 小川湊は現在の小川付近に存在していたとされ、1413年（応永二十）十月二十五日、遠江守護代甲斐入道祐徳は遠江守護所の狩野七郎衛門尉に宛てた書状に「南禅寺領初倉庄百姓ら小河津へ越し米のところ（略）」とあり、初倉庄の年貢米が小川湊へ運搬されていたことを示している。また、五山文学者の漆桶万里居士が記した『梅花無尽藏』1485年（文明十七）によれば、「小河は大船多くして、道路甚だ汚穢、脚を投げべきの地無し」と小川湊の様子が記述されている。小川湊が年貢米の積出港であるとともに活発な交易活動により当時の小川湊の繁栄ぶりをみることができる。

小川にはかつて法永長者屋敷と伝わる城館跡がある。城主は、今川家臣の長谷川氏の可能性が指摘されている。昭和57年から昭和59年にかけて道場田・小川城遺跡においてその城館の一部も調査され、長辺150m短辺80mの堀で区画された館を中心とした周囲には鍛冶職人、木工職人の居住施設や宗教施設、有力者の屋敷地、商業的施設などが有機的に配置されていることが明らかとなった。遺物は、大量の瀬戸美濃製品をはじめ威信財でもある青磁・白磁も出土している。また、天目茶碗、茶入、瓦質風炉、茶臼などの茶道具が出土しており、有力者層にも喫茶が浸透していたことを示している。

このように道場田・小川城遺跡は有徳人と呼ばれた長谷川氏が小川湊を通じて、財を蓄えたことを示すとともに政治的にも地位を確立していく様子を示すものとして評価されよう。

## 参考文献

- 大石佳弘 1986 『赤塚遺跡』焼津市埋蔵文化財発掘調査報告書 III 焼津市教育委員会  
 片山健太郎 2011 『宮ノ腰遺跡III』焼津市埋蔵文化財発掘調査報告書 20 焼津市教育委員会  
 焼津市 2004 『焼津市史 資料編一 考古』  
 焼津市 2005 『焼津市史 通史編 上巻』

第3表 調査履歴

| 調査次   | 調査年    | 調査原因           | 遺構                   | 遺物                         | 備考      |
|-------|--------|----------------|----------------------|----------------------------|---------|
| 第1次調査 | 昭和61年度 | 焼津南小学校運動場改築    | 古墳時代 槽、土坑<br>近世 水田、溝 | 須恵器、土師器<br>山茶碗、墨書き土器、青磁、白磁 | 1986焼津市 |
| 第2次調査 | 令和3年度  | 焼津水産高等学校普通教室改築 | 古代 槽、土坑              | 須恵器、土師器、灰釉陶器、土舞            | 2022本報告 |

## 第2章 調査の成果

### 第1節 検出遺構

赤塚遺跡は、昭和61年に焼津南小学校の運動場改築工事に伴い、焼津市により発掘調査を実施している。遺構面は2面確認しており、近世の水田、溝、古墳時代後期の溝、土坑を確認している。このとき包含層からは古墳時代、平安時代、中世の遺物が出土している。黒灰色粘土層では山茶碗、その直下は暗灰色粘土層からは平安時代の遺物がわずかに出土している。古墳時代の遺構について、さらに下層の暗灰色砂質粘土層上面で検出されている。

今回の調査範囲は、市の調査範囲より約200m南に位置している。現地表面より1.6m下までは、盛土であった。このときに4本の丸太杭を1つの単位として、約2メートル間隔の列を確認した。学校関係者によると、現校舎以前には木造校舎があったとされ、おそらくその建物の基礎杭と考えられる。正確な建設時期は不明であるが、少なくとも昭和初期にはすでに建設されていたと考えられる。盛土下は青灰色粘土層が約40cm堆積しており、遺物は確認されていない。さらに下層は暗灰色粘土層が20cm堆積し、奈良時代から平安時代の遺物を含んでいた。この基本土層は、市が調査を行った土層堆積状況と概ね一致する。遺構確認面は、灰色粘土層で土坑4基、溝1基、小穴1基を検出した。灰色粘土下は灰色粘土、灰色砂質混じりの粘土、砂礫土という堆積状況であった。調査区の東側は以前、昇降棟があった場所で、解体工事により基本土層は遺存していなかった。

#### SD 1

SD 1は東西方向に延びており、残存長3.8m最大幅1m深さ約10cmであった。覆土から土師器、土壺が出土した。土師器にはS字甕の小片や遠江型の甕の破片があったことから、古墳時代から奈良時代・平安時代と考えられる。

#### SP 1

SP 1は調査区のほぼ中央に位置する。径0.35m深さ20cmである。黒灰色粘土層の單一層で、炭化物を含んでいた。そこからやや摩耗した須恵器、土師器甕、壺の細片が出土した。概ね奈良時代から平安時代であろう。

#### SK 1、2

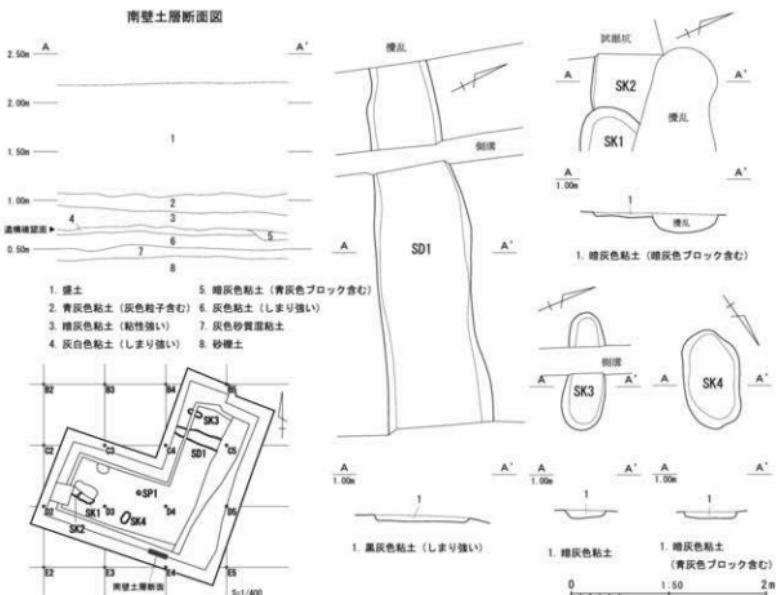
SK 1、SK 2は切り合っており、SK 1が新しい。SK 1は長径1.4m短径は搅乱によりきられているが、残存長0.6m深さ10cmで、覆土は黒灰色粘土であった。土坑の長軸は東西方向である。遺物は出土していない。SK 2は搅乱や試掘坑により切られているため規模は不明である。試掘坑からは多くの遺物が見つかっているため、このSK 2の遺物が含まれているのかもしれない。

#### SK 3

SD 1の北側には長さ1.2m幅0.4m深さ10cmのSK 3がある。長軸方向を溝1と同一にする。

#### SK 4

SP 1から南へ1.7mの位置にSK 4が検出された。SK 4は長径1.1m短径0.55m深さ10cmである。黒灰色粘土層の單一層で遺物は土師器の細片が出土した。覆土がSK 3やSP 1と同じ色調であることから同時期であろう。



第3図 造構図

第4表 造構観察表

| 造構番号 | グリッド  | 検出面標高(m) | 底面標高(m) | 深度(m) | 備考 |
|------|-------|----------|---------|-------|----|
| SD 1 | B・C 4 | 0.6      | 0.5     | 0.10  |    |
| SP 1 | C 3   | 0.6      | 0.5     | 0.11  |    |
| SK 1 | C 2   | 0.7      | 0.5     | 0.15  |    |
| SK 2 | C 2   | 0.7      | 0.6     | 0.05  |    |
| SK 3 | B 4   | 0.7      | 0.6     | 0.10  |    |
| SK 4 | D 3   | 0.6      | 0.5     | 0.10  |    |

## 第2節 出土遺物

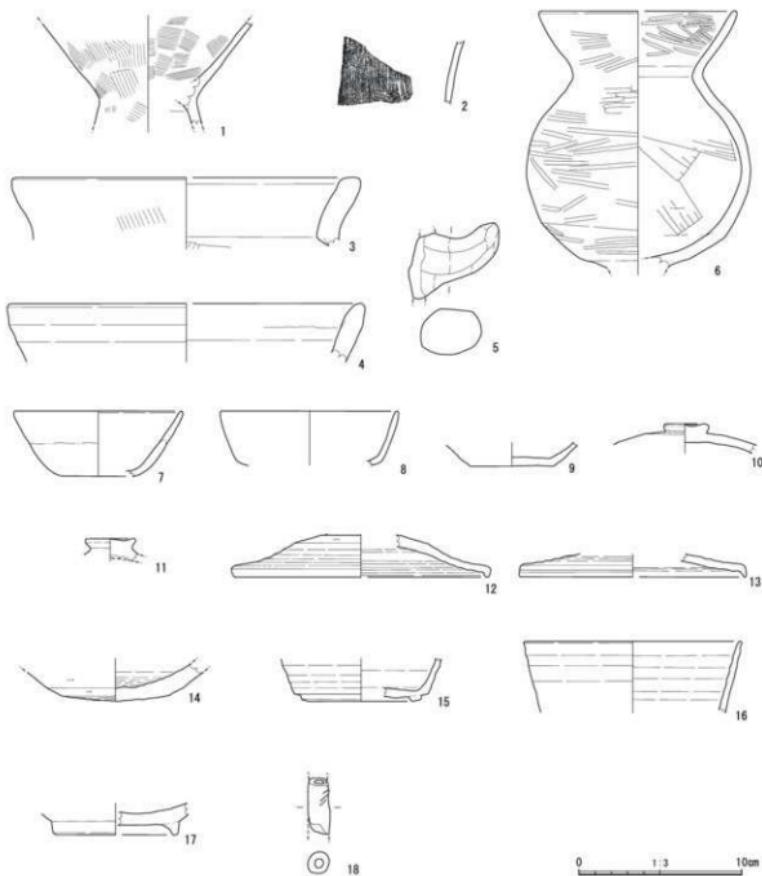
赤塚遺跡の令和3年度の調査では、弥生時代から奈良・平安時代の年代に属する土器17点、土製品1点を図化した。土器の大半は包含層より出土した。年代は奈良・平安時代主体となっていることから、器種ごとに記述する。

第4図1(図版3)は弥生土器の台付き甕である。令和2年度に行った試掘確認調査の6層より出土した。破片は数多く見つかっているものの、脆く、小片であったため、接合できたものは少なかった。特徴のある甕の底部から台の部分を図化した。体部と台部の接合部径は6.0cm、残存高は7.3cmである。色調は、にぶい黄橙色で、胎土は径0.2cm以下の小礫を多く含み、径0.1cm以下の長石がわずかに含まれる。

る外面は縦方向のハケ調整、内面は横方向のハケ調整で整形している。やや風化して脆い状態となっている。今回の調査で出土した弥生土器は、この1片のみで、出土遺物としては最も古い弥生時代後期に属する。

第4図2(図版3)は溝跡SD1の覆土より出土した。S字壺の体部破片で、残存高は3.9cmを測り、非常に薄い。外面は縦方向のハケ調整があり、内面はナデている。胎土には細かい透明粒子を含んでいる。小片のため型式は不明であるが、弥生時代末から古墳時代初頭の時期に属するものであろう。

第4図3・4(図版3)は土師器の甕口縁部である。いずれも包含層より出土した。3は復元口径が21.4cm、残存高は4.2cmである。口縁から体部は「く」の字に屈曲する。胎土には0.1cm径の白色粒子と砂粒を含んでいる。面はハケ調整後、ヨコナデにより整形している。表面にハケの痕跡が一部、残っている。



第4図 遺物図

第5表 出土遺物観察表

| 排回<br>番号 | 図版<br>番号 | 遺構名 | 層位  | 種類  | 器種  | 残存部位  | 残存率 | 口径<br>(cm) | 最大径<br>(cm) | 底径<br>(cm) | 器高<br>(cm)   | 色調                    | 備考         |
|----------|----------|-----|-----|-----|-----|-------|-----|------------|-------------|------------|--------------|-----------------------|------------|
| 1        | 4-2      | TP1 |     | 土師器 | 台付甕 | 体部～台部 | 30  |            |             |            | (6.0)        | 10YR 7/2 にぶい黄橙色       |            |
| 2        | 4-1      | SD1 |     | 土師器 | 台付甕 | 体部    | 5   |            |             |            | (3.9)        | 7.5YR 5/3 にぶい褐色       |            |
| 3        | 4-1      |     | 包含層 | 土師器 | 甕   | 口縁部   | 10  | (21.4)     |             |            | (4.2)        | 7.5YR 5/4 にぶい褐色       |            |
| 4        | 4-1      |     | 包含層 | 土師器 | 甕   | 口縁部   | 10  | (22.0)     |             |            | (3.6)        | 5YR 4/4 にぶい赤褐色        |            |
| 5        | 4-1      |     | 包含層 | 土師器 | 甕   | 把手    | 100 |            |             |            |              | 7.5YR 7/3 にぶい橙色       | 径2.3×3.7cm |
| 6        | 4-3      | TP1 |     | 土師器 | 壺   | 全体    | 40  | (12.2)     |             |            | (15.8)       | 5YR 7/6 灰色            |            |
| 7        | 4-4      |     | 包含層 | 土師器 | 壺身  | 全体    | 15  | (10.4)     |             |            | 4.0          | 7.5YR 6/3 にぶい褐色       |            |
| 8        | 4-4      |     | 包含層 | 土師器 | 壺身  | 全体    | 10  | (11.0)     |             |            | (3.4)        | 7.5YR 6/3 にぶい褐色       |            |
| 9        | 4-4      |     | 包含層 | 土師器 | 壺身  | 底部    | 80  |            |             |            | (5.2)        | (1.5) 7.5YR 7/3 にぶい橙色 |            |
| 10       | 4-4      |     | 包含層 | 須恵器 | 壺蓋  | 全体    | 20  |            |             |            | (1.8)        | N 7/ 灰白色              | 横み部径2.7cm  |
| 11       | 4-4      |     | 包含層 | 須恵器 | 壺蓋  | 摘み部   | 100 |            |             |            | (1.4)        | 10YR 7/4 にぶい黄橙色       | 摘み部径3.1cm  |
| 12       | 4-4      |     | 包含層 | 須恵器 | 壺蓋  | 全体    | 10  | (15.6)     | (16.0)      |            | (2.6)        | N 6/ 灰色               |            |
| 13       | 4-4      |     | 包含層 | 須恵器 | 壺蓋  | 全体    | 10  | (14.0)     |             |            | (1.4)        | 10YR 8/1 灰白色          |            |
| 14       | 4-4      |     | 包含層 | 須恵器 | 壺   | 底部    | 50  |            |             |            | (2.3)        | 10YR 7/2 灰白色          |            |
| 15       | 4-4      |     | 包含層 | 須恵器 | 壺身  | 全体    | 25  |            |             |            | (7.4) (2.7)  | N 5/ 灰白色              |            |
| 16       | 4-4      |     | 包含層 | 須恵器 | 壺身  | 全体    | 15  | (13.4)     |             |            | (4.4)        | N 5/ 灰色               |            |
| 17       | 4-4      |     | 包含層 | 山茶碗 | 碗   | 底部    | 25  |            |             |            | (7.7) (1.95) | 2.5Y 7/1 灰白色          |            |
| 18       | 4-5      | SD1 |     | 土錐  |     | 全体    | 80  |            | 1.3         |            | (3.5)        | 10YR 6/4 にぶい黄橙色       | 孔径0.5cm    |

4は同じような厚みを持つ口縁部片である。口径は復元で22.0cm、残存高は3.6cmで、胎土には径0.1cmの砂粒と白色粒子が含まれている。3とはよく似ているが別個体と判別できる。外面にはヨコナデの痕跡がある。

第4図5(図版3)は土師器の瓶把手部分である。把手の径は2.3×3.7cmを測る。にぶい橙色で、胎土に径0.1cm弱の灰色粒子を多く含んでいる。体部片は、今回の調査では見つかっていない。

第4図6(図版3)は土師器の壺である。1と同じく令和2年度に行った試掘確認調査の6層より出土した。復元口径は12.2cm、体部の最大幅は13.8cm、残存高は15.8cmで、底部は欠損している。体部外面には煤が付着しているが、全体の色調は橙色である。胎土には径0.1cm以下の小礫や長石を含んでいる。外面は前面に横位のヘラミガキがある。体部内面は板ナデ、口縁の内面はナデのちヘラミガキで整形している。底部から体部への切り替わりには稜線がある。古墳時代中期に属するものか。

第4図7(図版3)は土師器の壺身で、口縁部から底部の一部が残る破片である。包含層より出土した。口径は10.4cm、器高は4.0cmと小振りである。胎土には0.05cm径の白色・灰色粒子を含んでいる。全体にナデ調整されているが、体部中央に輪積み痕が見える。

第4図8(図版3)は包含層より出土した土師器の壺身である。口径は11.0cm、残存高は3.4cmで、ナデ調整されている。胎土には0.05cmの灰色粒子が含まれている。

第4図9(図版3)は包含層より出土した土師器の壺身底部片である。底径は5.2cm、残存高は1.5cmで、全体はナデ整形されている。胎土には細かい白色粒子を含んでいる。底から体部にかけては、明瞭に屈曲している。8～9は奈良・平安時代に属する土師器と思われる。

第4図10(図版3)は須恵器の壺蓋で、擬宝珠状の摘みと体部の一部が残っている。中央がへこんだ摘みの径は2.7cmで、全体の残存高は1.8cmである。色調は灰白色で、胎土には0.05cm以下の白色粒子を含んでいる。体部上面は回転ヘラ削りで、摘みと内面は回転ナデにより整形されている包含層より出土した。

第4図11（図版3）は包含層より出土した須恵器の坏蓋の摘み部分である。中央がへこんだ擬宝珠状を呈する。摘みの径は3.1cm、残存高は1.4cmである。全体の色調はにぶい黄橙色で、0.05cm径の白色粒子を含んでいる。

第4図12・13（図版3）も須恵器の坏蓋である。包含層より出土した。12は体部片で、復元口径は15.6cm、残存高は2.6cmで、最大径は16.0cmを測る。胎土には微細な白色粒子をわずかに含んでいる。上面は回転ヘラ削りで重ね焼き痕がある。内面は回転ナデによる整形がある。13は復元口径が14.0cm、残存高は1.4cmで、灰白色の色調である。胎土には微細な白色粒子が含まれている。いずれも10、11の摘みとは別個体である。

第4図14（図版3）は包含層より出土した須恵器の丸底壺底部である。残存高は2.3cmで厚みがある破片である。外面は回転ヘラ削り、内面は回転ナデによる整形で、内面底には降灰軸が付着している。灰白色で、胎土は砂粒と微細粒の白色粒子をわずかに含んでいる。

第4図15（図版3）は包含層より出土した須恵器で、高台を持つ坏部片である。高台径は7.4cm、残存高は2.7cmである。口縁部は欠損し、体部から底部にかけて残っている。高台外は回転ヘラ削りで、それ以外は回転ナデにより整形している。胎土には細かい白色粒子を含んでいる。

第4図16（図版3）は須恵器の坏身で、口縁部から体部の破片である。包含層より出土した。口径は13.4cm、残存高は4.4cmで、全面、回転ナデにより整形している。10から16までの須恵器は奈良時代に属するものである。

第4図17（図版3）は包含層より出土した山茶碗の底部片である。高台径は7.7cmで、残存高は1.9cm程である。底部は回転糸切痕があり、ナデにより高台を貼り付け、内面もナデている。内面には重ね焼き痕がある。鎌倉～室町時代に属するものであろう。

第4図18は土師質の土鍤である。溝SD1の覆土より出土した。残存長は3.5cm、幅は1.3cm、孔径は0.5cmを測る。胎土には細かい白色粒子が含まれている。年代は正確には追えないが、同じ溝SD1からは第4図2（図版3）のS字甕の体部破片が出土している。

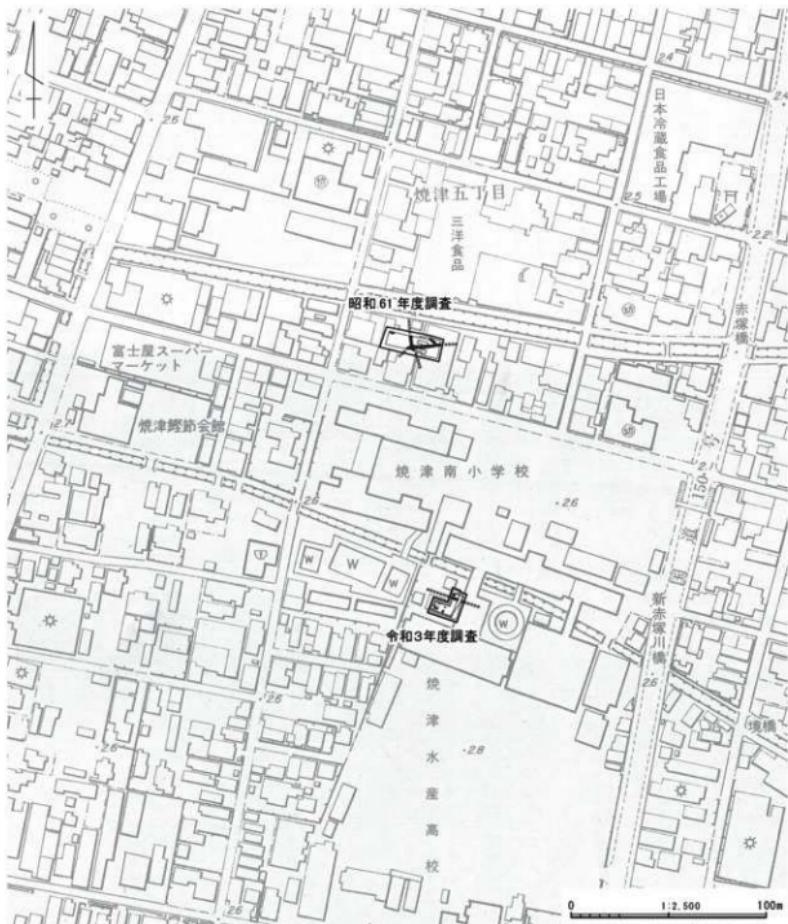
### 第3章 総括

赤塚遺跡は、昭和61年に焼津市立焼津南小学校の体育館建築の事前に行われた発掘調査が第1次調査に当たり、今回の焼津水産高等学校の校舎改築に伴う調査が第2次調査となる（第3表）。焼津市焼津地区は、市の中心部にあたり、早くから市街化が進み、埋蔵文化財発掘調査の機会も数少ない。近隣では、約100m北側で、古墳時代後期の土器が発見された須賀遺跡は、河川改修工事に伴い調査が行われた。いずれも小規模な発掘調査であることから、須賀遺跡も赤塚遺跡も、その全体像などの実態は、ほとんど分かっていないのが現状である。

今回、事前に第1次調査で明らかとなった古墳時代の集落跡が見つかる期待もあったが、第2次調査でも、その一部が検出された。遺構としては、古墳時代前期に遡る可能性のある溝と、小規模な土坑と小穴など少ないが、包含層に含まれていた遺物は、弥生土器や古墳時代～奈良・平安時代の土師器や須恵器、灰釉陶器などと、幅広い年代の土器が出土した。特に、これまでの近隣の発掘調査では発見例がなかった台付き甕（第4図1）は、弥生時代後期に属することから、当地でも弥生時代の人々の生業跡が見つかることも高まってきた。また、溝跡SD1からは、古墳時代前期に属するS字甕の体部片（第4図2）も出土していることから、継続的に生業活動が行われていたことも想定される。

もう一つ、新たな成果も見つかっている。第2次調査では、包含層より奈良時代から平安時代の土器が発見された。第1次調査でも7世紀中頃から末頃に属する土器があることから、一帯では8世紀代にも人々の営みが継続して行くことや、あるいは今後、奈良時代以降の集落跡が見つかることも期待される。

これまでの結果を踏まえて、遺構の分布や周辺の確認調査や本発掘調査から、集落の中心は西側に広がっていくことが想定される。西側約900mには焼津微高地に官之腰遺跡が存在する。距離が離れていることから直接の繋がりは考えにくい。大井川の氾濫原が広がる志太平野では、必ずしも安定していない微高地にある集落が、時期によって、安定した微高地を求めて移転していくことも考えられる。



第5図 赤坂遺跡の調査箇所

今回の調査成果は、過去に言われてきた焼津市域の低湿地遺跡を再検討する課題に対し、有益な検討素材を得たと言える。しかしながら、市街化が進んだ区域では、埋蔵文化財の発掘調査の機会も少なく、遺跡の全容が解明されるのは、まだ先のことになるであろう。

#### 参考文献

- 大石佳弘 1986 『赤塚遺跡』焼津市埋蔵文化財発掘調査報告書 III 焼津市教育委員会  
焼津市 2004 『焼津市史 資料編一 考古』  
焼津市 2005 『焼津市史 通史編 上巻』

写真図版

## 図版 1



1 赤塚遺跡遠景（綾津漁港方面を望む）

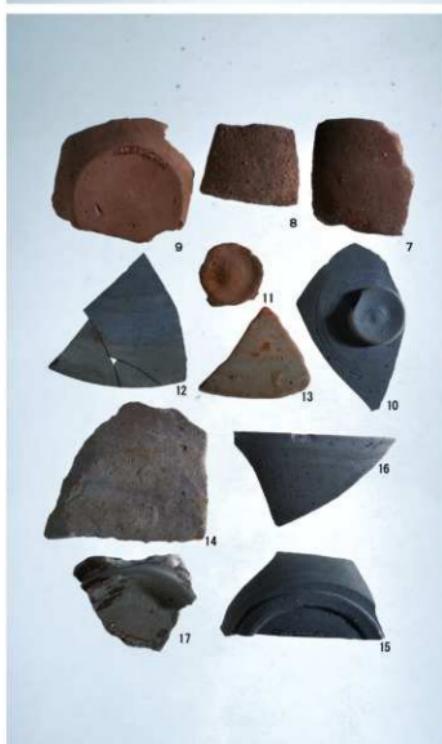


1 赤塚遺跡全景（南東から）



2 SD 1 完掘状況（北東から）

図版 3



出土遺物

## 報 告 書 抄 錄

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第67集

赤塚遺跡

焼津市

令和3年度焼津水産高等学校普通教室棟老朽化対策工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

令和5年2月15日発行

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター

〒421-3203 静岡県静岡市清水区蒲原5300-5

TEL 054-385-5500 (代)

FAX 054-385-5506

印 刷 所 みどり美術印刷株式会社

〒410-0058 静岡県沼津市沼北町2丁目16番19号

TEL 055-921-1839 (代)

FAX 055-924-3898